

アトリエ 琉游舎 だより 26号

2018年5月9日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

惜春・立夏・日長

- ☆季節の変化がアナログからデジタルになって来ていると感じるのは、私だけでしょうか。
- ☆もう少し春の空気を感じていたいのに、今年ももう何度か夏の空気が乱暴に侵入してきました。とは言っても日記を繰ると去年もそんな日が幾日かあったようなので、異常気象というには大げさなのでしょう。こんな気持ちになる惜春の時。
- ☆ついこの間まで冬だったのに、もう春を惜しみ、夏の気配を感じる時期となりました。八十八夜も過ぎ遅霜の心配も無くなって、種まきや野菜の苗を植える立夏の時。
- ☆日が長くなりました。一日の時間が長くなり、なんだか得をしたような気分になります。草木国土ますます活動が活発になる日長の時。
- ☆春を惜しみ、来る夏の予感を風を感じるこの季節は実は一年で一番過ごしやすい季節。爽やかで穏やかな空気と夏ほど自己主張しない日ざし、日の出から日の入りまで約14時間。
- ☆琉游舎も段々朝が早くなり、夜が遅くなりました。春を惜しみ、日長を楽しみに、琉游舎にお立ち寄りください。定期的に開催している会ばかりでなく、ふらっと立ち寄って、本を読んだりおしゃべりをしたり、ぼっとしたり、考えたり、何かをするためだけでなく、何もしないための時間を過ごすことのできる場所です。

詩話会

5月12日(土)
13時半から

映画会

毎週木曜日
13時半から

読書会

5月22日(火)
13時半から

6月3日(日)
6月5日(火)
13時半から

写経会

5/17 木	13時半	オール・ザ・キングスメン (109分)	プロデリック・クロフォード。1949年アカデミー賞作品賞。三部門を受賞しながら政治の裏側を徹底的に暴いているため日本公開されなかった問題作。
5/24 木	13時半	下町の太陽 (86分)	山田洋次監督、倍賞千恵子、勝呂誉主演。監督の長編初作品。「男はつらいよ」シリーズを彷彿とさせる荒川沿いの下町を舞台に、貧しさからの脱却にもがく若者たちの青春を描く。
5/31 木	13時半	哀愁 (108分)	ビビアン・リー、ロバートテイラー主演。1940年アメリカ映画。映画史上屈指の恋愛映画と呼ばれ続けている名作。軍人と踊り子の美しくも悲しい恋物語。
6/7 木	13時半	馬鹿まるだし (87分)	山田洋次監督、ハナ肇主演。お人好しの暴れん坊を演じるハナ肇のキャラクターが炸裂。監督初めての喜劇映画にして寅さんシリーズのルーツとなる映画。
6/14 木	13時半	緑園の天使 (128分)	エリザベス・テイラー主演。デビュー当初の彼女が颯爽と馬を駆り、馬場を駆け抜ける。馬好きの娘が暴れ馬を育てて、最後には騎手となり大レースに臨みます。
6/21 木	13時半	九ちゃんのでっかい夢 (84分)	山田洋次監督、坂本九主演。人気絶頂期の九ちゃん主演のスラップスティックコメディ。歌、ダンス、ものまねなど稀代のエンターテイナー九ちゃんの魅力溢れる一本。

「国に俗あり。道、これがために異なり」「竺人の、幻における、漢人の、文における、東人の絞における」この言葉は江戸時代に仏教思想発達史を独自の視点から説き起こした富永仲基の「出定後語」の中の一節です。経典はすべてお釈迦様の生涯の中で説かれた言葉であると固く信じられていた江戸時代に、彼は「経典は古い経典（教説）の上に新たな要素（教説）を加えながら（加上）その経典の優位性を示し発展してきた歴史だ」という独自の「加上説」によって、仏教の思想発達史を科学的に説明した学者です。この詳細については今回は煩雑になるのでこれ以上触れませんが、その思想発展史を語る「出定後語」の中で先の引用の文言に出会いました。この文言は、お釈迦様の教えが2500年あまりの時と、数えきれない人たちと、数多の山河を渡って、今この時、ここ琉游舎までよくぞ辿り着いたという感慨を私にもたらせました。今回はこの文言について触れてみたいと思います。

先の引用文を全体の主張から読み解くと「国（民族や地方）にはそれぞれ固有のくせ（風俗習慣）があり、そのくせが教説・思想に大きな影響を与える」「インド人は空想的・神秘的、中国人は修辭的で誇張する、日本人は正直で簡潔、隠すくせがある」と書かれています。仏教発展史は空想的なインド人がお釈迦様の教えを思想としてまとめ上げ、修辭的な中国人が言葉によって日本に伝え、日本人はそれを正直に簡潔にまとめ（念仏や題目などにして）教えを広めていったという大雑把なとらえ方ができるでしょう。

私はお釈迦様の教えの（原始仏教）本質的な部分をまとめると「合理的」「現実的」と言う言葉に行きつくと考えます。今回はこのまとめを提示するだけにとどめますが、もし私の考えが間違っていなければ、お釈迦様の合理的で現実的な教えは空想的で神秘的なインド人の手にかかり、時を重ねるとともに「観念的」で「空想的」な教えへと変質してしまったような気がするのです。それを今度は言葉の技術にたけた中国人が修辭たっぷりのお経に仕上げ、正直で真面目な日本人はそれをそのまま受容したのです。こう考えるとインドで仏教が滅びたのも納得がいきます。観念的空想的な世界を登り詰め、もうそれ以上登るところがなくなったとき、お釈迦様の考えた現実的な教えの山はいつの間にか神秘的な山に変質し、密教を頂点として反対側のヒンズー教の方にポロリと転がり落ちてしまったような気がするのです。中国では文を極めた仏教の教えはいつの間にかインテリの修辭学に墮し、民衆の要望と乖離して、ついには道教などの民衆宗教の中に取り込まれて行ったのではないのでしょうか。

日本人は簡潔にまとめるまではよかったのですが、宗教、学問、芸能などの本質部分を、秘事や作法などとして口頭で伝授することでしか弟子に相承しなかったため、いつの間にかうべの形式や方法だけが広まって、その方法を支える本質的な部分が忘れ去られていく傾向があったような気がします。「仏さまの教えは題目の『南無妙法蓮華経』の七字にすべて包摂されている。」と簡潔にまとめるまではよいのですが、なぜそう言えるのか、日蓮上人の書かれた原典にあたって、その解説書にあたっては私は今一つ完全に理解できないのです。それは念仏の「南無阿弥陀仏」にも同じように言えることです。おまえは信心が足りないから理解できないのだと、えらいお坊さんや学者から叱られそうですが、分からないものをさも分かったように語ることは、ありのままに観ると言うお釈迦様の教えに反することになるでしょう。

お釈迦様が最初に唱えた仏教の教え（原始仏教）は当時のインドの社会、風土、民族性の中から生まれたものであり、今そこで生きている人の問題を解決する、「合理的」で「現実的」な教えであったことは間違いのないでしょう。だからお釈迦様と弟子たちは互いに「善知識（善き友）」として同じ道をともに歩むことができたのです。ところで、「国に俗あり（民族のくせ）」のフィルターを幾度も通過し、日本にたどり着いた今ある「お釈迦様の教え」と呼ばれるものは、果たして現実社会に生きている人の問題を解決する教えとなっているのでしょうか。

仏教の教えの根本は言うまでも無く不変です。「現実の世界の生きる苦しみを滅し、やすらぎのところにたどり着くための行いの実践」です。そのためにその人、その時、その社会に合わせていろいろな実践方法が説かれてきました。根本さえ諦めることができれば、大樹のように茂る、空想と修辭の枝葉が切り落とされたい幹がみえてくるはずです。幸い「東人の絞における」と富永仲基が喝破したように、私たち日本人は要点を簡潔に正直にまとめることのできるくせを持っているようなので、教えの本質を特権階級の秘事とせず、隠すことをしなければ、分かったことは分かったままに、分からないことは分からないままに、お釈迦様の教えを示すことができるはずです。

竺人や漢人が教えを理解するために必要とした空想的誇張の装いは、東人には厚化粧で装飾過多だと言ったら彼らに失礼にあたるでしょうか。普通の日常を素直にあるがままに過ごすことを「行い」と信ずるここ琉游舎では、

すっぴん、普段着が似合うようです。それではまた次号でお会いしましょう。（出琉）

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/